八戸工業大学第一高等学校

住　所　八戸市白銀町右岩渕通り七の一〇
生徒数　男子一五六五名　女子二七四名
部員数　男子六〇名
部　長　新山　芳樹
監　督　向谷地　芳久　コーチ　若井　弘司

一つの時代が形成されてゆく場合において、その形成過程を正しく理解しておく必要がある。それは、次の時代がどうであればよいのか、どのように推移してゆけばよいのかを考えてゆくのに大切な事である。

さて、我が空手道部は、今年の六月で結成十二年目を迎える。この機会を一つの節目にして、今までのことを顧みて新しい一歩を踏み出して行きたいと思う。十二年前の結成した当時から比べると、我が部における環境は整い、卒業生達から見ればうらやましいかぎりと思われる。あの厳寒の中、廊下での練習は、どんなにつらいものかは素足で行なうスポーツを経験した者でなければ理解できないはずである。現在は、小体育館を専用に使用させていただいており、ストーブも一器ある。「先生、イズマデ、ローガデ、ヤネバネェデスカ」、「運動部は企業と同じだ。力関係で練習場が決まるんだ。だから早く良い戦績を残すんだ。頑張ろう」と生徒に話していたことが昨日のように思える。

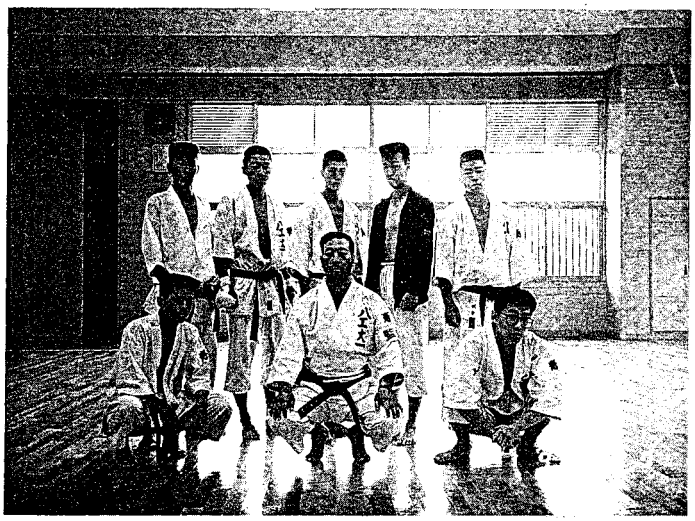
昭和五十七年、我が部にとってデビュー戦となった春季大会はむつ市で行われた。青森県スポーツ校の御三家と言われ、本校のライバル校でもあった学校と同宿となったため、部員たちは不安であったと思われ、旅館での食欲はあまりなかった。その夜の事であった。ライバル校の空手道部の先生が就寝してから、その学校の選手たちの行動は目にあまるものがあった。初めての試合で初めての生徒引率をしてきた自分であったが、非常に驚くとともに腹が立ち、他校の生徒であるにもかかわらず叱りつけてしまった。案の定、その学校は次の日の試合で、男女とも一回戦で負けてしまった。その時程、部活動にとって生活指導がしっかりしてなくては、勝てないと感じさせられた事はない。

昭和六十一年春、初めての全国大会、全国高等学校空手道選抜大会に出場した。（六十一、六十二、平成元、平成三、出場）

武道館は学生時代に二度来たことはあったものの、大変に広く感じられ選手も自分も顔がひきつっていた。三回戦、茨木県の水城高校とぶつかり、選手は健闘し二勝二敗一引き分けであった。だが、わずか一ポイントの差で内容負けとなった。しかし、この大会で得た事は大きかった。形では負けたとはいえ、準優勝校と引き分けたということと、そして、次の日に行われた強化親善大会において、全国の代表校の胸をかり七戦全勝という結果であった。我が部のレベルは、全国でも上位に位置することを肌で感じ、自信をつけて帰ってこれた。しかし、肝心の県高校総体で、悪夢の三回戦負けを喫してしまった。インターハイへ行って、大暴れしようとちかっていたのだか……。

力は我がチームの方が上なのに、敗北したのは何故なのか、その原因はなんなのか、勝利するために何をすべきか……。

その解答は、技術的なことではなく、日常の生活の中にあると思われる。人として当たり前の事を感じ、当たり前な事が出来なければ勝利できる力があっても、勝利する事は難しい。当たり前な事が出来ても決して勝利するとは限らないが、それが出来なければさらに勝利は遠退く。もし、当たり前の事をしなくても勝利できるとすれば他のチームが相当レベルの低いチームの時だけである。全国大会に出てくるチームには、そのようなチームは非常に少ないはずである。さて、当たり前な事とはなんであるかと言えば、挨拶、掃除、服装、言葉遣い、遅刻、欠席をしない等のことで、日頃どこのクラス担任でも口すっぱく言い続けてきている事である。さらに、自分は勿論のこと他人に対して、どのくらい思いやりの心を持てるのか、どのくらい木目こまかく気を配れるのかなども、非常に大切な事である。我がチームを見てみると、以前に比べ部員の問題行動はなくなったものの、前述した当たり前の事や、思いやり、木目こまかさに欠ける者が多い。特に女子部員にその傾向が強い（現在は男子部員だけである）。



例えば、毎日の事なのに、言われなければ雑巾の準備が出来ない。乱暴なドアの締め方やお茶の入れ方、叱られなければ元気な挨拶が出来ない、自分に直接関係した事でなければ、見て見ぬふりをしている。監督が心配しているのに報告しない、周りを気にせず、持参した弁当を食べたい時に食べる。言い尽くせないくらいたくさんの例はある。どれも、人として生徒として、当たり前に気が付かなければならない事や、人を思いやる心の薄さから生ずる現象である。そういう生徒を選手にしても、自分のコンデションを整えたり、チーム全体の事を自ら考えて行動できるはずはなく、したがって、自滅したり相手の勢いやムードに負け、格下のチームに敗北を喫す。このような事の多い我がチーム、我が生徒をどのように指導していったら良いのだろうか。それは、先ず指導者である自分が、木目こまかで、人に対して思いやる心が豊かでなければならず、日常の生活指導を、きちんと出来る人物とならなければならない。そして、当たり前の事を感じさせ行動にむすびつけるには、部員たちに口やかましいくらい飽きずに疲れても、しつこく説諭を繰り返すしかない。それをやらなければ、決して全国制覇は無理である。

全国大会に出場する学校のほとんどは、経験者を集めてチームをつくっている中で、勝つ事は非常に困難な事である。しかし、条件はどうであれ、これからも日本一の練習量と日本一の部員数で、そういうチームに追いつき、追い越し、勝利するためにも、大事で、基本となる生活指導を忘れないで頑張ってゆきたい。